「住吉夢想百韻」去嫌一覧（Ⅱ）

			季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	釈	人	名	衣	時	夜	風	聞
三表	51	しをるなよ みにいまよりの あきのかせ	秋															人					風	
	52	ゆふこえくれは やまそかさなる				旅				山											夕			
	53	ふりそむる あしたの**ゆき**に こまなへて	冬						獣				降								朝			
	54	かれのをとふは たたみやこひと	冬					□										人						
	55	やふしわかす もとめはうめや はなもみむ	春					草木																
	56	あせたるむらの はるさむきかけ	春									□												
	57	ひまかこふ のきはのかすみ ころもかせ	春	衣								居		聳						衣				
	58	やまにもみこそ かくしわひぬれ	春				述			山								人						
	59	おもひたつ ひとへこころに よをいてて					述																	
	60	あさきをきくも のりならすやは														釈								
	61	わたれひと ふねまつほとの みつもなし		船							水							人						
	62	はるるもいてぬ さみたれのやと	夏									居	降											
	63	**つき**そうき くものいつこに ふけぬらむ	秋	月										聳	光							夜		
	64	よはひややかに ほたるとふかけ	秋						虫													夜		
三裏	65	をきにかせ いはぬおもひの こたへして	秋					草															風	
	66	ゆふへのしらは いかかしのはむ			恋																夕			
	67	まちうかれ われやゆかむの みちのへに			恋													人						
	68	みえはやひとも こころなからし			恋													人						
	69	やまさとの **はな**をかへさに をりわひて	春					木		山		居												
	70	たつねよまたも なき**さくら**かは	春					木																
	71	たたになと あたらはるひを つくすらむ	春												□									
	72	ねさめするよの うつるたにをし																				夜		
	73	おときけは よそのしくれを まくらにて	冬	枕									降									夜		聞
	74	くもらぬ**つき**に ものなおもひそ	秋	月											光							夜		
	75	あらさすは やとにやはみむ のへのあき	秋									居												
	76	むしのいろいろ みたれてそなく	秋						虫															
	77	まちいつる かせのとたえに つゆおきて	秋										降										風	
	78	しをれもやまし をふねさすそて		船							水									衣				
名表	79	おりたつを おもへあしかる わさなれや						草			水													
	80	こひちにいかて たかふこころそ			恋																			
	81	よやはうき たれうらめしき ひとならむ			恋													人						
	82	おいをなせめそ かからさらめや					述																	
	83	あきはしくれ ふゆはしもよに ふしわひて	冬										降									夜		
	84	このはふりゆく あかつきのいほ	冬					木				居									△	夜		
	85	かけさひし あらしや**つき**に のこるらむ	秋	月											光							夜	風	
	86	やまさむけにも まつむしそなく	秋						虫	山														
	87	よるかたも あらしすみかに あきはきて	秋									□												
	88	ひとのこころの みゆるゆふくれ																人			夕			
	89	よむうたや なほみのうきを たねならむ																人						
	90	おもひをのへは ものことにあり																						
	91	さく**はな**の かたはらとほく かすむのに	春					木						聳										
	92	はやしをしめて すめるのとけさ	春					木																
名裏	93	きかしたた はるはいくかの かねのこゑ	春																		▽			聞
	94	ひかりもかけも けにそはかなき																						
	95	ともしする かたやまかはの うかひふね	夏	船					鳥	山	水											夜		
	96	みつよりはやし あくるなつのよ	夏								水										△	夜		
	97	ささなみの こゑこゑしのに をりはえて	夏								水					神								聞
	98	はつかせたちぬ やなきちるかけ	秋					木															風	
	99	つゆみたれ ひくらしなきて のこるひに	秋						虫				降		光									
	00	みにしむいろは たたあきのそら	秋															人						

「住吉夢想百韻」去嫌一覧（Ⅰ）

			季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	釈	人	名	衣	時	夜	風	聞
初表	01	すみよしの まつこそみちの しるへなれ		松				木											名					
	02	とほさとをのの **ゆき**のかへるさ	冬			旅							降						名					
	03	ふねよする はまへのまさこ **つき**さえて	冬	船月		旅					水				光							夜		
	04	こゑもむらむら ちとりなくなり	冬						鳥															聞
	05	わかかとの いなはいろつき ふくかせに	秋					草				居						人					風	
	06	かきほをあらみ すすきちるころ	秋					草				居												
	07	くれふかき つゆのかよひち あとたえて	秋										降								夕			
	08	いくへのしもそ みるもすさまし	秋										降											
初裏	09	をちこちの かねにめさめて いつるよに				旅																夜		
	10	しつまるやとり ひとやねぬらむ										□						人				夜		
	11	たれとなく すすしき**つき**に こゑふけて	夏	月											光			人				夜		聞
	12	みつにそやまの こころをもしる								山	水													
	13	かせをのみ **はな**はうらみし よしのかは	春					木			水								名				風	
	14	はやくもかはる ふるさとのはる	春									居												
	15	つれてこし ちきりもかりの わかれちに	春						鳥															
	16	うかへるくもの よをはたのまし												聳										
	17	みちならぬ みはわひぬるも つらからて																人						
	18	よしふりぬとも かかるよもきふ						草				□												
	19	うつろへは つゆこそ**つき**の みやこなれ	秋	月									降		光							夜		
	20	あきのやまにや たひをわすれむ	秋			旅				山														
	21	なくしかに わかつまこひを なくさめて	秋		恋				獣									人						
	22	あはさらめやの ゆふへたにうし			恋																夕			
二表	23	さのみやは たのめしことの あたならむ			恋																			
	24	うらみしこころ みえもこそすれ			恋																			
	25	たへねたた おもふにかなふ ひともなし																人						
	26	やすけなるみも よそめなりけり																人						
	27	みつをとも やまをとなりの くさのいほ						×		山	水	居						×						
	28	よふかきしもに かはかせそふく	冬								水		降									夜	風	
	29	たつをしの あとをうきねの こゑわひて	冬						鳥		水											夜		聞
	30	ひとりや**つき**の ゆくへをもみむ	秋	月											光			人				夜		
	31	わかさらむ あきのそらかは まてしはし	秋																					
	32	いさやいのちの のちのゆふつゆ	秋				述						降								夕			
	33	くさのはら なこりわすれぬ ひともかな						草										人						
	34	**さくら**うちちり さとそふりゆく	春					木				居												
	35	たちなれし かりはのかたの はるくれて	春						□										名		▽			
	36	ありかやいつく ききすなくこゑ	春						鳥															聞
二裏	37	**ゆき**なから かすむとやまの あさことに	春							山			降	聳							朝			
	38	いふきおろしそ なみにのこれる								山	水								名				風	
	39	ふねわたす よなかに**つき**は かたふきて	秋	船月							水				光							夜		
	40	まつにふけての ほしあひやうき	秋		恋										光							夜		
	41	あきをちきり くれをたのむも いたつらに	秋		恋																夕			
	42	なほいつまての おもひならまし			恋																			
	43	かりのみを はしめなきよに うけそめて																人						
	44	たれをうらやみ たれをくたさむ																人						
	45	さかぬきも ときしる**はな**の ひとさかり	春					木																
	46	やまはみとりの はるふかきいろ	春					□		山														
	47	かすみこく あまのつりふね とほきえに	春	船							水			聳				人						
	48	はまなのはしを たたにやはみむ									水								名					
	49	すみわたる **つき**にいそくな あまつかり	秋	月					鳥						光							夜		
	50	こはきうつろふ いねかてのころ	秋					草														夜		

林をしめてすめるのどけさ

93　**聞かじたゞ春は幾日の鐘の声**

《解釈》林の一隅に居を占める長閑な生活。入相の鐘が聞こえ、一日が過ぎて行く。春はあと何日あるのだろうか。過ぎゆく春が惜しまれ、入相の鐘を聞くのがつらくてならない。

※「鐘」は単独では夜分としての取り扱いをうけるが、「今日」「明日」「昨日」「幾日」「日数」などと結んで用いられれば入相のこととなり、夜分を遁れるというのが古来の作法。従って、第九五句の「ともし」や「鵜かひ」と指合にならない。

聞かじたゞ春は幾日の鐘の声

94　**光も陰もげにぞはかなき**

《解釈》時日というのは、あっという間のはかないもの。一日の経過を示す入相の鐘は、聞きたくなくとも聞こえて来る。今年の春も、あと何日なのだろうか。

※「光も陰も」は「光陰」を訓読した表現、経過する時間のことである。連歌では「光の陰」という形で用いられることが多い。「つながれぬ月日に涙さきだちて／光の陰をあはれとや見む」（文安雪千句・第十「花之何」八三／八四）など。

光も陰もげにぞはかなき

95　**ともしする片山川の鵜かひ船**

《解釈》一方の岸が山陰になっている川での鵜飼。闇の中、篝火が川面の波に映え、光と陰が交錯する。時を忘れるほどの面白さであるが、生業のためとは言え、所詮は殺生を重ねるはかない所業である。

※前句の「光」「陰」は、この付合では揺れる波に篝火が映ずる陰影の描写となり、闇夜の川に繰り広げられる鵜飼の夢幻的な光景が彷彿される。それだけでも宗祇ならではの技量と言えるが、それを更に仏教的世界観で包み込んで「はかなし」と否定的に総括する所が宗祇の宗祇たる所である。救済の名句と喧伝される「罪の報ひはさもあらばあれ／月のこる狩場の雪の朝ぼらけ」（菟玖波集・六-五六一）と比較すれば、両者の立場の違いが納得されよう。そして、味読しつつ比較すれば、やはり宗祇の連歌に一日の長があるのではないかと私には感じられるのであるが、それは所詮、私レベルの感想でしかない。なお、「光」に「ともし」、「陰」に「片山」と語を対応させているのもちょっとしたポイント。『下草』（二三六）に入集。

ともしする片山川の鵜かひ船

96　**水よりはやし明くる夏の夜**

《解釈》一方の岸が山陰になっている川での鵜飼。面白さに時の経つのも忘れている中に、夜が明けてしまった。本当に、夏の夜が明けるのは、この川の流れよりもはやいようだ。

水よりはやし明くる夏の夜

97　**さゞ波の声〳〵しのにをりはえて**

《解釈》夏越の祓えの夜。川社を営み夏神楽が催される。絶え間のないさざ波の音に加えて、折しも「篠波」を歌う声が聞こえてくる。面白さに時の経つのも忘れている中に夜が明けてしまった。夏の夜が明けるのは本当に、この川の流れよりもはやいようだ。

※付句の「しのにをりはえ」というレトリックから「延喜御時屏風に、夏神楽の心をよみ侍りける：川社しのにをりはえ干す衣いかに干せばか七日干ざらむ」（新古今・一九-一九一五、貫之）を想起するのは、当時の知識人なら常識。夏神楽を詠じた付合である。「さゞ波の声」は第一義的には神楽歌の「篠波」を歌う声であるが、当然、祓えする川のさざ波の声も掛けられている。『下草』（二六〇）に入集。

※第九三句に「声」とあり、同字の指合を生じている。

さゞ波の声〳〵しのにをりはえて

98　**初風たちぬ柳ちる影**

《解釈》夏越の神事で神楽歌の「篠波」を歌う声が絶え間なく聞こえていた一夜が明けると、今日はもう秋である。早速に初風が立ち、柳の葉を散らしている。

※同じ「かげ」でも、「陰」「影」と書き分けられる場合は同字五句去の作法は適用されず、間隔は二句以上で可。従って、第九四句の「陰」と指合にはならない。

初風たちぬ柳ちる影

99　**露乱れ蜩鳴きて残る日に**

《解釈》秋となって間もないころの夕べ。初風が吹き、それが柳の葉を散らし、置き初めた露を乱している。蜩も鳴き始めたが、日はまだ夕焼けの空に残っている。

露乱れ蜩鳴きて残る日に

00　**身にしむ色はたゞ秋の空**

《解釈》秋の夕暮。蜩が鳴いている。露が置き乱れているのは気温が急に低下したからだろう。日はまだ沈みきってはいないが、空は次第に暗くなり、秋の情趣が身にしみる。

※挙句は慶賀の気分で百韻を終えるのが古来の作法。当該句はそれに外れている。後の明応八年三月二十日「何人」独吟の挙句「わが影なれや更くる灯」に通ずる事象である。

木の葉が降り落ちる音がする。いや、あれは時雨が通り過ぎる音かも知れない。

※「時雨」に「木の葉」、「霜」に「暁」と寄合を取っている。前者の他の例は「月に降る時雨なりけり松の風／夜の木の葉や音に散るらむ」（延文五年十一月十三日「何船」一／二）など。証歌は「木の葉ちる宿は聞き分くこともなし時雨する夜も時雨せぬ夜も」（後拾遺・六-三八二、源頼実）など。後者は「幾重の霜の野に凍るらむ／暮れしよりなほ暁は冴ゆる夜に」（嘉吉元年二月二十六日「何人」八／九）など。証歌は「おく霜の暁起きを思はずは君が夜殿に夜がれせましや」（後撰・一三-九一四、よみ人しらず）など。

※別に、「時雨」及び「霜」に「ふる」（降る・経る・古る）が寄合となる。先例は、前者が「さだめなや夜の時雨の今朝の雲／遠き高根に降れる初雪」（顕証院会千句・第五「唐何」五一／五二）など。後者は「霜がれの草こそ道になりにけれ／下には降らぬ松の初雪」（紫野千句・第六「手何」九／一〇）など。ただし「時雨」や「霜」に「ふる」と付けるのは所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

木の葉降りゆく暁の庵

85　**かげさびし嵐や月に残るらむ**

《解釈》茅屋の冬の暁。嵐の音に目を覚ます。外では、吹き残りの風に木の葉がはらはらと落ちて行くのが、月影に照らされて見える。独居の寂しさが身にしみる。

※『下草』に入集する（三六八）。「嵐や月に残るらむ」というレトリック、やはり絶品であろう。「かげさびし」と端的に主観語を用いる所が宗祇好み。

かげさびし嵐や月に残るらむ

86　**山寒げにも松虫ぞ鳴く**

《解釈》嵐が通り過ぎた山。名残の風がまだ草木をなびかせ、それが皓々とした月に映じていかにも寒々としている。まだ死に絶えてはいなかったのか、松虫の鳴く音がかすかに聞こえる。寂しさが身にしみる。

※「嵐」に「松虫」が寄合。他の例は「月に吹く天つ嵐やよわるらむ／草葉にしげし松虫の声」（永正七年十月二十日「何人」九一／九二）など。「とふ人も今は嵐の山風に人まつ虫の声ぞかなしき」（拾遺・三-二〇五、よみ人しらず）の和歌が有名。

山寒げにも松虫ぞ鳴く

87　**よる方もあらじ住処に秋は来て**

《解釈》（世間並ではない）私のような者が住む所にも、秋は同じようにやって来る。最近は山の姿も寒げになり、庭では松虫が鳴いている。これからは、もうここに立ち寄る人もいなくなることだろう。

※「住処」は居所ではなく、居所とは間隔二句以上で可とされる。従って、第八四句の「庵」と指合にはならない。

※「松虫」に「すみか」が寄合になる。証歌は「野辺にとる我が松虫の鳴く声もなれし住処を恋しくや思ふ」（玉葉・四-六一九、法皇御製）など。連歌での他の例は「山も裾野も松虫の声／秋は身の今はの住処しるらめや」（永正八年十一月三日「山家」八四／八五）など。ただし、稀なものである。

よる方もあらじ住処に秋は来て

88　**人の心の見ゆる夕暮**

《解釈》私のような者の住処にも秋はやって来る。世間並みの人の所なら、秋ということで訪れる人が増えるのだろうが、ここに来る人はこれからもあるまい。自分が世間の人にとって無に等しい存在だということが思い知らされる、そんな夕暮だ。

人の心の見ゆる夕暮

89　**よむ歌やなほ身の憂きを種ならむ**

《解釈》自分が世間の人にどう思われているかを思い知らされるような夕暮の寂しさ。和歌は、人の心を種とするものだと言う。自分が和歌を詠むとしら、この寂しさ・つらさが種なのだろう。

※『古今集』仮名序の「やまと歌は人の心を種として」云々の有名な一節に拠って「人の心」に「種」と付けている。先例は「人の心ぞ歌にやはらぐ／月みれば涙の種となるものを」（応永三十年五月二十七日「何人」七二／七三）など。

よむ歌やなほ身の憂きを種ならむ

90　**思ひを述べばものごとにあり**

《解釈》和歌は、人の心を種とするものだと言う。自分が和歌を詠むとしたら、この我が身の寂しさ・つらさが種なのだろう。その寂しさ・つらさは、見るもの・聞くもの、ありとあるものにつけて述べることができよう。

※『古今集』仮名序で、先の付合での引用に続き「心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひ出だせるなり」とある。後の連歌なら、本説が三句にわたっていると言われかねない付合であるが、用語的に逃れていると判断されたのであろう。

思ひを述べばものごとにあり

91　**咲く花のかたはら遠く霞む野に**

《解釈》桜花の咲く傍ら、野は、薄霞の中に遥かに見渡され、春の情趣に満ち溢れている。その春の情趣を述べるなら、あらゆるものにつけて述べることができそうだ。

※前句に「ものごと」とある効果で、「かたはら遠く霞む野」というだけで、うららかな春日や、囀る鳥や、緩く吹く風に揺れる若草などまで想起させるのが宗祇の名人芸。ただし、自撰句集に入集しないのは、彼にとってこの程度は「並の上」なのだということであろうか。

咲く花のかたはら遠く霞む野に

92　**林をしめてすめるのどけさ**

《解釈》春の林の一隅に居を占める長閑な生活。桜花の咲く傍ら、野は薄霞の中に遥かに見渡され、長閑な春の情趣に満ち溢れている。

※付句の仕立は「里は荒れて人は古りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる」（古今・四‐二四八、僧正遍照）を本歌としている。『下草』に入集（三九二）する。

荒らさずは宿にやは見む野辺の秋

76　虫の色〳〵乱れてぞ鳴く

《解釈》手入れする人もなく荒れたままになっているこの庭の風情は、まるで秋の野辺のようで、色々な虫が、それぞれに己が音を立てて鳴いている。もし手入れの行き届いた庭だったら、この情趣に身を置くことはできなかっただろう。

※「秋の野」に「虫鳴く」はもちろん寄合だが、例示の必要もあるまい。

虫の色〳〵乱れてぞ鳴く

77　待ち出づる風のとだえに露置きて

《解釈》風の途絶えを待って宿を出る。風に吹き散らされた露は、あたり一面に乱れ置かれ、色々な虫が、それぞれに己が音を立てて鳴いている。

※秋風によって露が吹き散らされ、一面に乱れて置かれる様の例としては「秋風は吹きむすべども白露の乱れて置かぬ草の葉ぞなき」（新古今・四‐三一〇、太弐三位）など。

※「乱る」に「露」が寄合。所謂「体付」である。他の例は「誰を引く檀の下葉乱るらむ／頼む心も安達野の露」（宝徳四年千句・第九「何衣」七三／七四）など。

待ち出づる風のとだえに露置きて

78　しをれもやまじ小船さす袖

《解釈》風の途絶えを待って船を出す。今まで風に当たって萎れさせられていた船人の袖は、また、露と降りかかる波の滴に濡れて萎れる。船人の袖が萎れない時はないのだ。

※船人の袖は「風にも」「波にも」萎れるという発想。「風」の例は「旅ごろも秋の草木にあらねどもなほ山風にしをれてぞ行く」（続古今・一〇‐八九五、中宮権大納言雅忠）など。「波」の例は「清見潟月にうき寝を秋ぞとも契らぬ波にしをる袖かな」（建保名所百首・五〇九、俊成卿女）など。個別的にはありふれた措辞であるが、それを船人の袖について一つにした所がポイント。

しをれもやまじ小船さす袖

79　下りたつを思へ芦かるわざなれや

《解釈》船から下り立ち芦を刈る。何のためか思いやって下さい。貧しいが故の生業です。だから、小船をさす私の袖は、水に濡れ涙に濡れて萎れない時はないのです。

※『大和物語』所載の有名な「芦刈」の説話（一四八段）を踏まえた付合である。「芦かる」には「悪しかる」が利かされ、ここでは「貧しい」の意で用いられている。

下りたつを思へ芦かるわざなれや

80　恋路にいかでたがふ心ぞ

《解釈》水辺の低湿地に下り立ち芦を刈る。泥（こひぢ）に踏み入れ足を取られると、にっちもさっちも行かなくなる。私の恋の道もそれと同じ。進むことも引くこともできない。こんなはずではなかったのに、どうしてこうなったのだろう。

※「恋路」に「泥」を利かせるのは、古典文学でパターン化された手法。「男のはじめて女のもとにまかりて朝に、雨の降るに帰りて遣はしける：今ぞ知るあかぬ別れの暁は君をこひぢに濡るゝものとは」（後撰・九‐五六七、よみ人しらず）など。

※稀にしか用いられない語なので、例は少ないが、「芦」に限らず「蓮」「菖蒲」など低湿地に生える植物は、全て「こひぢ」と寄合になる。他に「芦かるわざに身をな尽くしそ／踏みそめていつかこひぢの果ならむ」（池田千句・第九「唐何」四四／四五）、「あひ見るゆゑのこひぢなりけり／枯れねたゞ同じ蓮も何ならむ」（延徳四年三月三日「初何」五〇／五一）など。

恋路にいかでたがふ心ぞ

81　世やは憂き誰恨めしき人ならむ

《解釈》世の中が辛いと言う訳ではない。取り立てて恨みに思う人がいる訳でもない。不満はないのだ。それなのに、恋の道を行くことだけは、どうしてこうも思い通りにならないのだろうか。

世やは憂き誰恨めしき人ならむ

82　老をなせめそかゝらざらめや

《解釈》世の中が辛いと言うが、取り立てて恨みに思う人がいる訳でもない。年老いたせいにするのも間違いだ。人は誰でもこうなるのだから。私だけが特別に辛いのではない。世の中は、誰にとっても辛いものなのだ。

老をなせめそかゝらざらめや

83　秋は時雨冬は霜夜にふしわびて

《解釈》年をとるとはつらいもの。秋・冬の夜は体が冷える上に、時雨や霜が降りかかったりすると、もう寝付くことができない。時雨よ、霜よ、そう老人をせめ苦しめないでくれ。

※前句の「かゝる」は、先の付合では「かくある」という意味。それが、この付合では、時雨や霜が「降りかかる」意味になる。

※「かゝる」に対し「時雨」「霜」と付けている。所謂「体付」である。他の例は、「時雨」は「照る日ながらや雲かゝるらむ／峰わけの一とほりなる村時雨」（紫野千句・第十「唐何」六八／六九）、「霜」は「枯れたる芦にかゝる白雪／むら〳〵に松の葉青く霜ふりて」（文明十四年三月二十日「何人」六／七）など。『下草』に入集（四三〇）。「秋は時雨冬は霜夜に」と続くレトリック、絶品ではあるまいか。

秋は時雨冬は霜夜にふしわびて

84　木の葉降りゆく暁の庵

《解釈》茅屋での独居生活。秋から冬にかけて、時雨の音の寂しさや霜夜の寒さが身にしみ、寝付くことができない。今夜も眠れないまま暁を迎えてしまった。外では、

ているので、それに拠るべきであろう。「山川草木、花鳥風月、悉皆有情」の宗祇の連歌では、あらゆるものが擬人化される。擬人化表現であることを明瞭にするため、解釈では「夕べさん」とした。

※前句の「いはぬ思ひ」は、先の付合では蛍のこと。それを人の恋に取りなして句境を転じた付合である。

夕べの知らばいかゞしのばむ

67　待ちうかれ我や行かむの道の辺に

《解釈》あなたを待ち焦がれて、私の魂は私の肉体から遊離し、あなたの所へ行ってしまいそうです。その道すがら、あなたの所へ行く私の魂が、夕べさんに見とがめられたら、どうしましょう。夕べさんは、それをあちこちに言いふらすかもしれません。そうなったら、私がいくら耐え忍んでも無駄になることでしょう。

※恋に身を焦がし狂気寸前の女性の様を「待ちうかれ我や行かむの道」と表現した所がさすが宗祇。多分、誰にもマネできない技。『下草』に入集する（六四八）。

※肉体とは別個に魂が存在し、魂は主体の意志に関係なく肉体から遊離することがあるというのは古典文学の常識。「もの思へば沢の蛍を我が身よりあくがれにける魂かとぞ見る」（後拾遺・二〇・一一六二、和泉式部）の例が名歌として有名。

待ちうかれ我や行かむの道の辺に

見えばや人も心なからじ

68

《解釈》あの人を待ち焦がれて、私の魂は肉体から遊離し、あの人の所へ行ってしまいそうです。そして、もし、あの人の所へ行った私の魂が形象化してあの人に認識されれば、あの人は私のことを、少しは憐れに思ってくれることでしょう。

※「魂が形象化して相手に認識される」というのは、思いがけず夢などにあらわれること。これも古典文学の常識。「夜をかさねあくがれ出づるわが魂の夢の枕に見えざらめやは」（隆信集・七五二）の例が分かりやすい。

見えばや人も心なからじ

山里の花を帰さに折りわびて

69

《解釈》山里への花見の帰途。土産に一枝折って帰ろうかと思うが、どうも気がとがめる。見つかったらどうしよう。けれど、その人にも花を賞美する心がないわけはないだろうから、私の気持ちは理解してもらえるはずだ。それでも、やっぱり気がとがめる。

山里の花を帰さに折りわびて

尋ねよまたもなき桜かは

70

《解釈》山里への花見の帰途。土産に一枝折って帰ろうかと思うが、どうも気がとがめる。そうだ、近いうちにもう一度ここに来ればいいのだ。その時までに桜の花が散ってなくなっていることはないだろうから。

※土産に花を折り帰るのではなく、もう一度同じ場所に来れば同じ花を見ることができるという発想が目新しく面白い。「言葉は古く、心は新しく」の好例であろう。それを「尋ねよ」と自分自身に対する命令表現で言い、さらに「なき桜かは」と反語表現で結ぶ所、いかにも宗祇流である。

尋ねよまたもなき桜かは

たゞになどあたら春日をつくすらむ

71

《解釈》行楽日和の春の日、何もせずに家にいたままでは勿体ないでしょう。どうも適当な所が見当たらないなら、先日の所へ、また行きなさいよ。別段、一年に同じ所の花を二度見ることはできないなんていうことはないでしょう。

たゞになどあたら春日をつくすらむ

寝ざめする夜のうつるだに惜し

72

《解釈》情趣あふれる春の日を、無駄にするのは勿体ないでしょう。それは昼間のことに限りません。春の夜、ふと寝覚めることがあったら、外を御覧なさい。闇の中、目が慣れてくると、あらゆるものがおぼろに霞んで浮かびあがる。夜が明けるのが何だか惜しく感じるほどです。

寝ざめする夜のうつるだに惜し

音聞けばよその時雨を枕にて

73

《解釈》初冬の夜、ふと目が覚める。時雨の遠くに去ってゆく音が微かに聞こえる。更け行く夜の静寂に身を委ねていると、夜の明けるのが惜しく感じられる。

※「うつる」に「時雨」が寄合。他に「松よりうつる風の真葛葉／時雨るゝか信太の森の露深し」（応永二十五年十月二十五日「何船」六八／六九）など。所謂「体付」である。また「寝ざめ」に「枕」も寄合。「思ふこと夜な〳〵尽きぬ寝ざめして／涙のかゝる枕だに惜し」（文明十八年二月六日「何人」六七／六八）など。

※「音聞けばよその時雨」と言って、去りゆく時雨の音がかすかに聞こえる様を述べ、その音が遠くなるにつれて次第に周囲の静寂感が際立つように仕立てられている所が宗祇の技。「降り過ぐる時雨の音を枕にて」などでは一挙に凡庸な句になる。

音聞けばよその時雨を枕にて

くもらぬ月にものな思ひそ

74

《解釈》晩秋の夜、時雨が降り過ぎて、遠くに去ってゆく音がかすかに枕もとに聞こえる。空はもう晴れ、月が皓々とした光を地上に投げかけている。あれこれもの思いに耽るのは止そう。しばらくは、このきれいな月を眺めて心を慰めるのだ。

くもらぬ月にものな思ひそ

荒らさずは宿にやは見む野辺の秋

75

《解釈》手入れする人もなく、荒れたままになっているこの庭の風情は、まるで秋の野辺のようだ。それを月が皓々と照らす。もし手入れの行き届いた庭だったら、この情趣に身を置くことはできなかっただろう。シチュエーションとして、これほどのものがあろうか。それ以外、余計なことを思う必要はあるまい。

マシになるだろう。

※「霞」を擬人化した上で、「霞の衣」の歌語を「霞さんが所有している衣」のごとく取り扱って、「春だけれどまだ寒いので、衣を貸してほしい」と言葉の上で面白がった付合であり、そこに俳諧性が感ぜられる。近代の研究者にはほとんど無視されているが、このような付合も宗祇の一体として重要である。

隙かこふ軒端の霞衣かせ

58　山にも身こそ隠しわびぬれ

《解釈》俗世間を離れ、身を隠そうと、この山中に居を占めたのであるが、建物は隙間だらけで外から丸見えだ。これでは、とても身を隠すことなどできない。霞よ、お前さんの衣を私に貸してくれないか。それで隙間を塞ぎたいのだ。

※先の付合と同じく俳諧的な付合である。衣を貸して欲しいという理由を変えて、巧妙に句境を転換している。やはり宗祇の腕。

山にも身こそ隠しわびぬれ

59　思ひたつ一重心に世を出でゝ

《解釈》俗世を離れようと思い立ち、その一途な心で、この山中に身を隠すべく居を占めたのであるが、ここでも人影が全く絶えるということはなく、身を隠しきることはできそうにない。どうすればいいのだろう。

※「身こそ隠しわびぬれ」に「一重」と付けた所がポイント。「一重」は「単衣」のこと。裏がないので肌がスケスケになる。『源氏物語』賢木巻に「ひとへを着たまへるに、透きたまへる肌つき」云々とある例が分かりやすい。これも発想が俳諧的で面白い。

思ひたつ一重心に世を出でゝ

60　浅きを聞くも法ならずやは

《解釈》仏の教えにも深浅の差があるそうだが、別段浅い教えであっても仏の教えであることに違いはない。浅いのか深いのか知らないが、それを聞いて私は、ひたすらに俗世を出ようと思い立ったのだ。

浅きを聞くも法ならずやは

61　渡れ人船待つほどの水もなし

《解釈》仏の教えにも深浅の差があると言われているが、別段浅い教えであっても仏の教えであることに違いはない。人はそれを信じて、徒歩でも向こうの岸へ渡ればよい。川は、船でなければ渡れないほど水が深い所ばかりではないのだ。

※「法」に「乗り」を利かせて、それと「船」とが寄合。例は「心にとめぬ法のかなしさ／一夜寝る室の友船こぎ離れ」（美濃千句・第九「何色」三二／三三）など。

渡れ人船待つほどの水もなし

62　はるゝも出でぬ五月雨の宿

《解釈》旅の途次、降りつづく五月雨のために宿にとじこめられていたが、ようやく雨も止んで空も晴れた。次第に川の水嵩も減ってきて徒歩で渡れるほどになった。船でなければ渡れないほどではない。もういいだろう。さあ、出発だ。

※第五七句に「軒端」とあり、居所（宿）が間隔四句で指合を生じている。後の連歌では強く批判される所であるが、宗祇連歌の去嫌は時に鷹揚である。

はるゝも出でぬ五月雨の宿

63　月ぞ憂き雲のいづこに更けぬらむ

《解釈》宿に降りこめられていた五月雨も止んで、空も晴れた。夜も更けて月が見えるはずだが、どこにいるのだろうか、雲に隠れて見えない。月よ、どうして姿を見せてくれないのだ。私はつらいではないか。

※前句の「出でぬ」は、この付合では「月」のことになる。美しい表現の中に機知を利かしたいかにも宗祇らしい付合である。『下草』に入集する（六四八）。

月ぞ憂き雲のいづこに更けぬらむ

64　夜はひやゝかに蛍とぶかげ

《解釈》夏の夜は更けて、飛び交う蛍の光もひややかさを感じさせる。月が出ているはずだが、どこにいるのだろうか、雲に隠れて見えない。月よ、どうして姿を見せてくれないのだ。私はつらいではないか。

夜はひやゝかに蛍とぶかげ

65　荻に風いはぬ思ひのこたへして

《解釈》ひやゝかに更けてゆく初秋の夜。もの言わぬ蛍が飛び交う。荻の葉が風に吹かれて、そよと音を立てる。まるで、言うに言われぬ蛍の思いを思いやって、「そうだね」と応じているようではないか。

※若い人のために言えば、蛍は鳴かないが、思いの火に燃えるという発想は古典文学の常識。「音もせで思ひにもゆる蛍こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ」（後拾遺・三一一六、源重之）など。また、荻に風が吹くと「そよ」と音がするというのも常識。「荻の葉にそよと聞こえて吹く風に落つる涙や露と置くらむ」（続古今・四三〇〇、安法法師）が分かりやすい。「そよ」は「其よ」で、「そうだよ」という意味になる（岩波古語辞典）。

荻に風いはぬ思ひのこたへして

66　夕べの知らばいかゞしのばむ

《解釈》荻に風が吹いて「そよ」と音をたてています。言うに言えない私のこの思いに対し、まるで「そうだね」と応じてくれているようです。けれど、その声を聞いて、夕べさんまでもが私の思いを知ったら、どうしましょう。夕べさんは、それをあちこちに言いふらすかもしれません。そうなったら、私がいくら耐え忍んでも無駄になることでしょう。

※「夕べの知らば」の部分、「夕べの空は」とするテキストがある。現代人には「夕べの空は」の方が自然な気がするが、句集では諸本すべて「夕べの知らば」となっ

大地震によると言われている。この連歌の九年後である。

※「風わたる浜名の橋の夕塩にさゝれてのぼる海士の釣船」（続古今・一九-一七三〇、前大納言為家）に依拠して、「海士の釣船」に「浜名の橋」と付けているか。

浜名の橋をたゞにやは見む

49　**すみ渡る月にいそぐな天つ雁**

《解釈》秋の夜の浜名の橋。北は湖、南は海。広々とした夜空には雲一つなく、澄み切った月の光が隈なく地上を照らしている。雁が鳴きながら渡ってゆく。水面には月が影を映し、さらに、渡る雁の影さえもが映じている。雁よ、そんなに急がなくてもよい。この素晴らしい光景をただに見過ごすのは、お前だって惜しいと思っていることだろう。

※先の付合と同じく浜名の橋の叙景であるが、季節は春から秋へと見事に転換している。表現もこの上なく美しい。『下草』に入集（三〇六）するが、それも当然の付合と言えよう。

※可能性としてはいくつかの解釈があり得るが、雁も自分と同じように思っているだろうとして、雁に呼びかけているように解釈するのが、宗祇連歌の解釈として正しい。これは、理屈でなく、彼の連歌を数多く味読することで体得できるものである。私自身は、月が隈なく照らす空を行く雁にむかって、一体、彼以外の誰が「澄みわたる月に急ぐな」と呼びかけることができたであろうかとさえ思う。若い人のために、敢えて贅言する。

※連歌ではめったに詠まれない名所だが、「浜名の橋」に「雁」が寄合のはず。「初雁の声のゆくへも白波の浜名の橋の霧のあけぼの」（飛鳥井集・一〇〇三）など。

すみ渡る月にいそぐな天つ雁

50　**小萩うつろふい寝がての頃**

《解釈》秋もたけ、盛りだった小萩もうつろいはじめた頃、澄み渡った空の月が皓々と地上に光を投げかけ、それに照らされて雁の鳴き渡って行くのが見える。素晴らしい秋の情趣に、とても寝てなどいられない。雁よ、そんなに急がなくてもよい。この素晴らしい光景を、お前もゆっくりと味わえばいいのだ。

※「雁」に「萩」が寄合。他の例は「ひとり守る田の面の雁や露も憂し／下葉ももろく小萩ちる頃」（寛正二年正月一日「何人」九／一〇）など宗祇好みのものである。「夜を寒みころも雁がね鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり」（古今・四-二一一、よみ人しらず）の和歌が有名。

小萩うつろふい寝がての頃

51　**しをるなよ身に今よりの秋の風**

《解釈》秋もたけ、盛りだった小萩もうつろいはじめた。様々な思いが去来し、中々寝付くことができない。風の音が聞こえる。これから冬が近づくにつれ、風はさらに身にしむようになるだろうが、もうこれ以上、私に辛く当たらないでくれ。

しをるなよ身に今よりの秋の風

52　**夕こえ来れば山ぞかさなる**

《解釈》晩秋の旅の夕方、今日の道をあらためて振り返ると、越えて来た山々が背後に重なって見える。これから冬が近づくにつれ、秋風はさらに寒く身にしむようになるだろうが、もうこれ以上、私に辛く当たらないでくれ。

夕こえ来れば山ぞかさなる

53　**降りそむる朝の雪に駒なべて**

《解釈》今朝、雪が降り始めた所を、駒を並べて出発し、ここまで辿りついた。夕方になって来た道を振り返ると、今日越えて来た山々が背後に重なって見える。

※「夕」に「朝」と語を選び、「かさなる」に「雪」と寄合をとっているのがポイント。他の例は、前者は「秋霧は夕べをこむる籬にて／春の朝や色に霞める」（文安雪千句・第一「何路」六九／七〇）など。後者は「かさなる峰は遠き山の端／降り続くそれかと見ゆる富士の雪」（応永三十一年三月十八日「山何」二四／二五）など。

降りそむる朝の雪に駒なべて

54　**枯野をとふはたゞ都人**

《解釈》朝から雪が降り出した枯野。そこを訪れるのは、（鷹狩のために）馬を並べて行く都人ばかりである。

枯野をとふはたゞ都人

55　**薮しわかずもとめば梅や花も見む**

《解釈》都人が春の息吹を求めて枯野を訪れています。薮といわずあちこち隈なく探し求めれば、まだ莟の梅も、嬉しくてきっと花を咲開かせることでしょう。

※「日のひかり薮しわかねば石上ふりにし里に花も咲きけり」（古今・一七-八七〇、ふるのいまみち）を踏まえる。詞書に「石上並松が宮仕へもせで石上といふ所にこもり侍りけるを、にはかに冠たまはれりければ、よろこび言ひつかはすとて」云々とあり。

薮しわかずもとめば梅や花も見む

56　**あせたる村の春寒きかげ**

《解釈》人気も稀なさびれた村は、まだ寒々として、春を感じさせるものは何もないようです。それでも、薮といわずあちこち隈なく探し求めれば、梅が花を咲かせているのを見つけることでしょう。

あせたる村の春寒きかげ

57　**隙かこふ軒端の霞衣かせ**

《解釈》人気も稀なさびれた村。春はまだ寒々としているが、それでも霞に包まれている。私の住むこの陋屋は隙間だらけで、風が吹き込んで身に当たる。霞よ、お前さんの衣を、私に貸してくれないか。そうしてくれるなら、この寒さも少しは

す風の名残で波立っている湖面に、揺れながらその影を浮かべている。

※風が吹き過ぎた後、水面に映る月影の揺れる様を間接的に描写する手法が見事で、さすが宗祇と思わせる。『下草』に入集する（五八二）。

※「月」で秋季となるが、第三二句と間隔六句で指合を生じている。

船渡す夜中に月はかたぶきて
40　待つに更けての星あひや憂き

《解釈》夜も更けて月も南の空に入ろうとしはじめたが、いくら待ってもあの人は来ない。今夜は七夕。今頃は彦星の妻迎え船が天の川を渡っていることだろう。一年に一度しか逢えない二星ですら今夜は逢えるというのに、私はあの人に逢うことができない。それを思うと、つらさが募るばかりである。

※前句の「船」を天の川の船に取りなして、句境を大きく転じている。これも見事。

※「船」に「待つ」が寄合。他の例は「いづち出でなむ島かげの船／浦遠くともなふ人を待つ暮に」（熊野千句・第九「朝何」八八／八九）など（証歌省略）。ただし「船」に「待つ」と付けるのは所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

待つに更けての星あひや憂き
41　秋を契り暮をたのむもいたづらに

《解釈》秋になってからは、暮ごとに「今日こそはあの人が来てくれるのではないか」と思って待つのだけれど、あの人は来ない。「秋には必ず」といったあの人の言葉は一体何だったのだろうか。夜も更けた。今夜は七夕。一年に一度しか逢えない二星ですら今夜は逢えるというのに、私はあの人に逢えない。それを思うと、つらさが募るばかりである。

※「秋を契り暮をたのむ」というわざと字余りにしたレトリックの情感の深さ、私には、さすが宗祇としか言いようがない。

秋を契り暮をたのむもいたづらに
42　なほいつまでの思ひならまし

《解釈》秋になった。暮ごとに「今日こそはあの人が来てくれるのではないか」と思って待つのだけれど、あの人は来ない。「秋には必ず」といったあの人の言葉は一体何だったのか。そして、私はこんな思いで、いつまであの人を待ち続けねばならないのだろうか。

なほいつまでの思ひならまし
43　仮の身をはじめなき世にうけそめて

《解釈》限りもなく遠い昔からの因縁で、たまたま人間として仮の身を受けたのだが、この苦しみは、いつまで続くのか。この六道から解脱しない限り、永遠に苦の世界を輪廻するのだろう。

※「はじめなき」は「無始」の訓読語。仏教で「限りなく遠い昔から」の意。「六道」は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六界で、苦の世界。若い人のため。

仮の身をはじめなき世にうけそめて
44　誰をうらやみ誰をくたさむ

《解釈》我々は全て、限りもなく遠い昔からの因縁で六道に輪廻し、たまたま人間として仮の身を受けた存在。誰を羨もうが、誰をけなそうが、そんなことは無意味。みんな同じように苦の世界にいるのだ。

誰をうらやみ誰をくたさむ
45　咲かぬ木も時しる花の一さかり

《解釈》花の咲かない木のような自分であるが、それでも時々の花の盛りはわかる。だからと言って、誰かを羨んだり、誰かをけなしたりしようとは思わない。所詮は花の一さかり。栄枯盛衰は世のならいなのだから。

咲かぬ木も時しる花の一さかり
46　山はみどりの春深き色

《解釈》花の咲かない木のような自分でも時節の移り変わりはわかる。一時あれほどに咲き誇っていた花も散った。山々は緑の色が深く、春も終わりが近いのだ。

山はみどりの春深き色
47　霞こぐ海士の釣船遠き江に

《解釈》入江を漕ぎゆく海士の釣船が遠く霞の中に消えて行く。山々の緑も色濃くなり、晩春の情趣が深い。

※『下草』に入集する（六）。一見、平凡な眺望の付合でしかないようだが、そうではない。味読すれば、宗祇連歌のレベルの高さが感じられるものであることが知れる。仮に、付句に「霞」の語がなく「漕ぎかへる海士の釣船遠き江に」であったとしよう。それでは朦朧・駘蕩とした情趣の深さがなく、平凡な叙景句になってしまう。「遠き」がなく「霞こぐ海人の釣船わたる江に」だとしたら、眺望に奥行がなくなり、これも凡庸になる。「霞」も「遠き」も残して「遠き江の霞に消ゆる海士小舟」だとしても、仕立の美しさの面で大差である。そもそも「霞こぐ」という措辞も、「遠き江に」というレトリックも、私の調査の限り和歌には例の見出されないものである。若い人には、是非そこまで踏み込んで、宗祇連歌の水準を理解していただきたい。妄言多謝。

霞こぐ海士の釣船遠き江に
48　浜名の橋をたゞにやは見む

《解釈》入江を漕ぎゆく海士の釣船が、霞の中に消えて行く。この浜名の橋のあたりの素晴らしい光景を、人はただぼんやりと見過ごしてよいものだろうか。

※「浜名の橋」は遠江国の名所。古く浜名湖は海と隔たった淡水湖で、浜名川が流れ出て遠州灘に注いでいた。その浜名川に掛けられていたのが浜名の橋である。その辺りの当時の景色は『更科日記』や『東関紀行』に描写がある。なお、全くの蛇足だが、浜名湖が遠州灘とつながったのは明応七年八月二十五日、東海地方を襲った

ひとりや月のゆくへをも見む

31　**分かざらむ秋の空かは待てしばし**

《解釈》なんだ、君はもう帰るのか。しばらく待てよ。今夜は他でもない、一年でも特別だとされている名月の夜ではないか。二人で歓を尽くそう。私独りで月の行方を見守るなんてこと、させないでくれ。

※「分かざらむ秋の空かは」の意味が解りにくいが、「分かない秋の空」の反語で「分く秋の空」。「分く」を「区別する」の意味だとすると、並の秋の空ではない「特別な秋の空」ということで、前句の「月」との関連で「秋の名月の空」のことだと解釈した。一抹の不安はあるが、それで解釈はうまく行く。如何。

分かざらむ秋の空かは待てしばし

32　**いさや命ののちの夕露**

《解釈》死期を目前にして眺める秋の夕べの空。私の命は、あたりに置かれている露のように、はかなく消えることだろう。だから、もうしばらくこの夕べの空を眺めていたいのだ。私はもう、明日の夕べの空は眺めることはないだろうから。

※「分かざらん秋の空」は、この付合では「人生最後の日の秋の空」という内容になると思う。また、付句の仕立は超論理的に語を連鎖させているものなので、解釈が難しいが、右のごとくとした。如何。

いさや命ののちの夕露

33　**草の原名残忘れぬ人もがな**

《解釈》まもなく私の命は、置かれた夕露のように、はかなく消えることだろう。私は、所詮、草の原。わざわざ訪れる人などいようはずはないが、せめて忘れずに思い出してくれる人がいてほしいと思う。

※「草の原」は『源氏物語』花宴巻の「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」に基づく表現。「何の花が咲く訳でもない、ただの草の原」という意。

草の原名残忘れぬ人もがな

34　**桜うち散り里ぞふりゆく**

《解釈》咲いていた桜も散り、以前と同じ人目も稀な寂れた里になろうとしている。野も、今は草の原。わざわざ訪れる人などいようはずはないが、せめて桜を惜しんだことを忘れずに思い出してくれる人がいてほしいと思う。

※言わずもがなだが、前句の「名残」は、先の付合では「人との死別」。それを「花との別れ」に取りなして句境を転じている。

桜うち散り里ぞふりゆく

35　**たちなれし狩場の交野春暮れて**

《解釈》晩春の交野の里、桜がはらはらと散る。いつもここで狩をしていた都人たちが立ちされば、この里もまた古された所となることだろう。

※「桜」に「交野」が寄合。「またや見む交野の御野の桜がり花の雪ちる春のあけぼの」（新古今・二-一一四、皇太后宮大夫俊成）の名歌がある。連歌での例は、他に「桜がり春雨ふらばいかゞせむ／霞む交野は里もつゞかず」（文安四年十月十八日「朝何」八五／八六）など。「交野」は、河内国の名所。大阪府交野市。

※「春暮れて」は、季節の「暮」だから夕時分とはされず、夕時分とは間隔二句以上で可。従って、第三二句の「夕露」と指合にはならない。

たちなれし狩場の交野春暮れて

36　**ありかやいづく雉子鳴く声**

《解釈》狩のために何度も訪れた交野の里。雉子の鳴き声が聞こえる。どこで鳴いているのだろうか。明日の朝は、あのあたりに鷹を放つことにしよう。春が過ぎ去ろうとしている。間もなく狩の季節も終わりだ。

※春の鷹狩の状景である。前夜、鳴き声によって鳥のいる所を見当つけておき（聞きする鳥）、その夜は山中に泊り（泊り山）、翌朝早く鷹を放つ（朝鷹狩）のである。「鳴鳥狩」（ないとがり）とも言う。「狩場」に「雉」が寄合。他に「春の日をあかぬ狩場の暮ごとに／ふすや雉子の声かくすらむ」（文明五年二月一日「何人」一九／二〇）など。勿論「交野」に「雉」も寄合。「花にほふ交野の原に鷹するゑて／いつか狩路に雉子鳴くなり」（文安雪千句・第二「朝何」一一／一二）など。

ありかやいづく雉子鳴く声

37　**雪ながら霞む外山の朝ごとに**

《解釈》奥山はまだ雪のままだが、さすがに春、外山には、朝ごとに霞がかかるようになった。雉子の鳴く声がするが、あれはどこで鳴いているのであろうか。

雪ながら霞む外山の朝ごとに

38　**伊吹颪ぞ波に残れる**

《解釈》伊吹山はまだ雪で覆われているが、さすが春。外山には霞がかかっている。朝ごとに吹く伊吹颪も今は止んでいるが、その名残で湖面はまだ波立っている。

※前句の「朝ごとに」は、先の付合では「霞がかかること」。この付合では「伊吹颪が吹くこと」になる。伊吹颪が吹き止んだから、霞は流されずに外山にかかり、湖面にはその余波がまだ残っているということで、理屈がきれいに決まっている。

※「外山」に「伊吹」が寄合。「冬ふかく野はなりにけり近江なる伊吹の外山雪降りぬらし」（続古今・六-六四七、曽祢好忠）という歌がある。連歌では「船いそげ月は外山の朝わたり／伊吹颪の秋さむき空」（下草：龍谷大本・三-三九〇）など。

※「伊吹」は近江国の名所。第三五句「交野」と名所が間隔二句で指合を生じている。後の連歌なら強く批判されるであろうが、宗祇連歌は、去嫌に鷹揚な所がある。

伊吹颪ぞ波に残れる

39　**船渡す夜中に月はかたぶきて**

《解釈》夜中、琵琶湖を船で渡る。月はようやく西の空に傾き、伊吹山から吹き下ろ

《解釈》秋の山中の旅寝。あたりは一面の夜露で、その露の一つ一つに月の光が映じている。それは、まるで月世界の都もこうではないかと思われるような光景である。この幻想的な光景を見れば、旅の辛さも、しばし忘れることができるようだ。

秋の山にや旅を忘れむ

21　鳴く鹿に我が妻恋をなぐさめて

《解釈》旅の一夜。残してきた妻のことが思われてならない。牡鹿の妻を呼ぶ声が秋の山に響く。今夜、妻が恋しくて泣く（鳴く）のは、私一人だけではないのだ。そう思うと、旅の辛さも忘れ、少し慰められた気持ちになる。

※「秋の山」に「鹿」が寄合。先例は「思ひやる心も秋の山越えて／幾重の霧に鹿の鳴くらむ」（文明十二年九月八日「何人」四三／四四）など。「奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき」（古今・四-二一五、よみ人しらず）の和歌が有名。

鳴く鹿に我が妻恋をなぐさめて

22　逢はざらめやの夕べだに憂し

《解釈》恋は常に苦しいもの。この夕べ、約束してくれたのだから、行けば、あの人はきっと会ってくれるだろうと、そうは思いながらいるのだけれど、それでもやはり苦しい思いは変わらない。しきりに鹿の妻を呼ぶ声が聞こえる。あの鹿は今夜、妻に逢うことができるのだろうか。私と同じように苦しい思いをしていることだろう。私だけが苦しいのではない。そう思うと、少しは慰められる気持ちになる。

逢はざらめやの夕べだに憂し

23　さのみやは頼めしことのあだならむ

《解釈》きっとと約束した夕べ、あの人の来訪が待ち遠しくてならない。けれど、本当にあの人は来てくれるのだろうか。そう思うとかえって辛くなる。いや、まさか裏切られることはないだろう。いや、やっぱり不安だ。

※前句は、先の付合では男の立場。この付合では女性の立場になる。

さのみやは頼めしことのあだならむ

24　恨みし心見えもこそすれ

《解釈》きっと訪ねますよと、あんなにまで当てにさせておいてすっぽかすなんてあり得るでしょうか。あるはずはないでしょう。でも、あなたはすっぽかしましたよね。私は本当に恨みに思います。それはあなたにも解るでしょう。

恨みし心見えもこそすれ

25　たへねたゞ思ふにかなふ人もなし

《解釈》何事も思いどおりにならないこの世を、あなたがどれほど恨みがましく思っているか、それは私にもわかります。けれど、我慢するよりないのです。この世の何事をも自分の思い通りにできる人などいないのです。

※『下草』に入集する（龍谷大本九三〇、金子本一〇八〇、続類従本一〇六二、東山御文庫本一〇七四）。以下、『下草』入集句は、金子本の句番号のみを示す。

たへねたゞ思ふにかなふ人もなし

26　安げなる身もよそ目なりけり

《解釈》世の中に、何事も思いどおりになる人なんていない。満足できないことがあっても我慢するしかない。何の不満もなく安らかに暮らしているように思われる人だって、それはよそ目にそう見えるだけのことだ。

安げなる身もよそ目なりけり

27　水を友山を隣の草の庵

《解釈》近くを流れる水を友人とし、山を隣人とする茅屋での生活。何と安らかそうな生活だとは思うが、私にはそんな生活は無理。ただ余所ながら羨ましく思うのみである。

※「草の庵」に対して「水を友山を隣」と、平凡で地味な語を並べたレトリックを付加するだけで、清閑で安らかな独居生活が見事に想起されるのが、並の作者には到底マネすることはできない所。さすが宗祇。『下草』に入集する（一〇三六）。

※「水を友」の「友」は比喩であるので、人倫として取り扱われない。人倫は作法どおり第二五句（人）・第二六句（身）の二句で棄てられており、指合は生じない。

水を友山を隣の草の庵

28　夜深き霜に川風ぞ吹く

《解釈》近くを流れる水を友人とし、山を隣人とする茅屋での生活。冬の夜が更けてゆくにつれ、あたりは一面の霜となり、川風が身を切るように寒い。

夜深き霜に川風ぞ吹く

29　たつ鴛のあとをうき寝の声わびて

《解釈》冬の夜の川原。夜が更けてゆくにつれ、あたりは一面の霜となり、風が身を切るように寒い。番いの鴛鴦の一羽が飛び立って行った。残された一羽は、今夜、波の上に浮かびつつ寂しく寝るのだろうか、悲しそうな声が聞こえる。

※「霜の夜」に「鴛」が寄合。証歌は「夜を寒み寝覚めて聞けば鴛ぞ鳴くはらひもあへず霜や置くらむ」（後撰・八-四七八、よみ人しらず）など。連歌での他の例は「床は荒れていく夜の霜をはらふらむ／波にまた鳴く鴛のあはれさ」（延徳二年二月二十五日「何人」七九／八〇）など。

※水辺が第二七句（水）、第二八句（川）、第二九句（鴛）と三句連続するので体用の沙汰が必要であるが、第二九句の「鴛」は体用の外であるので、問題は生じない。

たつ鴛のあとをうき寝の声わびて

30　ひとりや月のゆくへをも見む

《解釈》冬の夜の川辺。番いの鴛鴦の一羽が飛び立って行った。残された一羽は、今夜は波の上に浮かびつつ独りで月の行方を見守るのだろうか、悲しそうな声が聞こえる。

る山の心を今は我が友とするまで住みなれにけり」（草根集・九六三〇）が挙げられる。

水にぞ山の心をも知る

13　**風をのみ花は恨みじ吉野川**

《解釈》（吉野川の）水に尋ねれば、（吉野山の）花の心を知ることができる。（吉野山の）花は、自分を散らす風だけを恨みに思っているのではないだろう（きっと、あっという間に去ってゆく春のことも、恨みに思っているはずだ）。

※「み吉野の山の心はけふや知るいつかは雪の降らぬ日はありし」（躬恒集・九五）の和歌に拠り、「山の心」に「吉野」と付けている。

※前句の「水」を「吉野川の水」のこととし、「山」を「吉野山の花」のこととして、それぞれ擬人化して、その問答とすることで、一見、何を言っているのか訳が分からなくなってしまった前句を、見事に処理している。それでいて、付句は、散りゆく花の情趣あふれる仕立となっているのは、宗祇ならではの技だと私は思う。

風をのみ花は恨みじ吉野川

14　**はやくもかはる古郷の春**

《解釈》古来、何度も行幸の地となった吉野。春はあっと言う間に過ぎ去って行き、風に散らされた桜の花弁が吉野川に流れ落ちる。山の花は、自分を散らす風だけではなく、早く過ぎ去る春をも恨みに思うことだろう。

※先の付合の内容は「風だけを恨みに思うわけではない」ということ。当然、次の付合では「では、風以外に？」という答えが期待される。多くの寄合を取りつつ、その期待に見事に応えている。行様の面白い所である。

※「吉野」に「古郷」が寄合。先例は「尋ね入る吉野の山の道とひて／へだゝるまゝに偲ぶ古郷」（応永三十二年閏六月二十五日「山何」二五／二六）など。また「川」に「はやし」が寄合。先例は「春をせけ夏こそ近つあすか川／流れてはやき水ぞ霞める」（文安雪千句・第十「花之何」三七／三八）など。共に証歌を挙げる必要はあるまい。ただし「川」に「はやし」と付けるのは所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。さらに、指摘するまでもないが、「花」に「春」も当然寄合である。

はやくもかはる古里の春

15　**つれて来し契りも雁の別路に**

《解釈》寂れた古郷。春とも間もなくお別れだ。雁も、北へ帰って行く。その中には、夫婦で渡ってきながら、伴侶を亡くして帰る雁もいることだろう。どれほど辛いことであろうか。

※「北へ行く雁ぞ鳴くなるつれて来し数は足らでぞ帰るべらなる」（古今・九-四一二、よみ人しらず）を前提にした付合。後注に「この歌は、ある人、男女もろともに人の国にまかりけり。男、まかりいたりてすなはち身まかりにければ、女ひとり京へ帰りける道に、帰る雁の鳴きけるを聞きてよめるとなむいふ」とある。

※「古郷」に「雁」が寄合。先例は「古郷人や衣うつらむ／一行は初雁がねの今鳴きて」（紫野千句・第三「何船」一〇／一一）など（証歌省略）。

つれて来し契りも雁の別路に

16　**浮かべる雲の世をばたのまじ**

《解釈》春の空を、雁は北へ帰ってゆく。その中には、夫婦で渡ってきながら、伴侶を亡くして帰る雁もいることだろう。どれほど辛いことであろうか。けれど、それが世の定め。あの空の浮雲のようにはかない世を、永続するものと当てにしてはならない。

※「雁」に「雲」が寄合。先例は「夕暮のそなたゆかしく雁鳴きて／天とぶ雲や風に行くらむ」（応永三十年十一月二十一日「何人」九三／九四）など。証歌は「春来れば雁帰るなり白雲の道ゆきぶりにことやつてまし」（古今・一-三〇、凡河内みつね）など。

浮かべる雲の世をばたのまじ

17　**道ならぬ身はわびぬるもつらからで**

《解釈》世間との係わりは一切捨てた身の上。侘しく思うことはあるが、辛いとは思わない。空に浮かぶ雲のような頼りない世の中にいるよりは、ずっとマシである。

※「道」は「世間の交際」（岩波古語辞典）の意味だとして解釈した。「我が身こそかゝる道狭き者となりて様を替ふるとも」（盛衰記・四〇）という例が挙げられている。如何。

※『論語』述而編に見える「飯疎飲水、曲肱而枕之、楽亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲」の章句を念頭においた付合だと私は思うが、如何。

道ならぬ身はわびぬるもつらからで

18　**よし古りぬともかゝる蓬生**

《解釈》世間との係わりは一切捨てた身の上。侘しく思うことはあるが辛いとは思わない。こんな蓬が生え放題の所で年をとるとしても、それはそれで仕方がないことなのだ。

よし古りぬともかゝる蓬生

19　**うつろへば露こそ月の都なれ**

《解釈》こんな蓬が生え放題の所で年をとるとしても、それはそれで慰みはある。秋の夜など、一面の蓬に置かれた露の一つ一つに月の光が映ずる。それは、まるで月世界の都もこうではないかと思われるような光景である。

※「蓬生」に「月」が寄合。先例は「霜こりつめる道の蓬生／古郷にめぐるや月のもとの秋」（宝徳四年千句・第八「山何」五四／五五）など。証歌は「秋ふけぬ鳴けや霜夜のきりぎゝすやゝ影寒し蓬生の月」（新古今・五-五一七、太上天皇）など。

うつろへば露こそ月の都なれ

20　**秋の山にや旅を忘れむ**

《解釈》雪の帰り道。遠里小野のあたりを通過する。雪で視界がきかず、ともすれば迷いそうになるが、住吉の松をしるべにすれば、迷うことはない。

※「遠里小野」は摂津国の名所。大阪市住吉区遠里小野。住吉大社との距離は約一キロ。「住吉の松のうれより響き来て遠里小野に秋風ぞ吹く」（続後撰・五‐二六七、後徳大寺左大臣）など。当然「住吉」に「遠里小野」が寄合となる。先例は「住吉のまつに程ふる時鳥／遠里小野の末の急雨」（文明十一年十一月二十二日「何船」九三／九四）など。他に「松」に「雪」も寄合だが、指摘するまでもないレベル。以下、寄合の指摘は必要と思われる範囲にとどめる。

遠里小野の雪のかへるさ

03　**船よする浜辺の真砂月冴えて**

《解釈》降る雪の中、船を汀に寄せる。砂浜は雪に覆われ、月の光がそれを皓々と照らしている。これから遠里小野まで帰るのだ。

※遠里小野は海に面していない。だから、解釈は右のようになると考える。如何。

船よする浜辺の真砂月冴えて

04　**声もむら〳〵千鳥鳴くなり**

《解釈》浜辺に船を寄せる。月影が汀の真砂を白く冴えざえと照らしている。千鳥の群れが声もむらむらに鳴いている。

※「むら〳〵→村千鳥」という秀句仕立である。ちょっと珍しい技法だが、他に「なびきぬるむら〳〵竹に鵙鳴きて」（永禄石山千句・第八「何木」五九）など。

※「浜」に「千鳥」が寄合。「浜千鳥」の歌語に依る。他に「船さす蜑をおくる浜風／夕波に鳴きて千鳥や過ぎぬらむ」（熊野千句・第一「山何」一二／一三）など。

声もむら〳〵千鳥鳴くなり

05　**我が門の稲葉色づき吹く風に**

《解釈》私の家の門田の稲葉も色づき、それが秋風にむらむらに靡いている。風に流されてやって来た千鳥の声もむらむらに聞こえてくる。

※「千鳥」に「我が門」が寄合。「我が門の千鳥しば鳴く起きよ〳〵我が一夜妻人に知られじ」の歌が『俊頼髄脳』等の歌書に引かれてよく知られている（元来は『万葉集』巻一六）。他の例は「と渡る千鳥をちこちに鳴く／我が門の冬田の落穂くち残り」（天文二十四年梅千句・第四「初何」三八／三九）など。また「むら〳〵」に「稲葉」と付けている。稲葉がまだらに見えるということである。他に「見れば雁なく雲のむら〳〵／秋風に稲葉の露や乱るらむ」（文明十五年二月十九日「何木」一八／一九）など。

我が門の稲葉色づき吹く風に

06　**墻ほをあらみ芒ちる頃**

《解釈》私の家の門田の稲葉も色づき、それが秋風にむらむらに靡いている。墻ほも隙がちになり、吹きぬける風によって庭の芒が散らされる頃なのだ。

※指摘する必要もないかもしれないが、「吹く風」に「芒ちる」と理屈づけた付合である。勿論「風」に「芒」が寄合。例は「花にかる草の枕を吹く風に／入野の芒露やおくらむ」（宝徳四年千句・第八「山何」四三／四四）など。

墻ほをあらみ芒ちる頃

07　**暮深き露のかよひ路あとたえて**

《解釈》朝夕に人が往来する道も、暮れるにつれて露が置かれ、人通りも絶えた。隙間がちになった墻ほを風が吹きぬけ、はらはらと芒が散ってゆく。

暮深き露のかよひ路あとたえて

08　**幾重の霜ぞ見るもすさまじ**

《解釈》往来の道は暮れるにつれて人通りも絶えた。深く置かれていた露は気温の低下に伴って幾重にも置き重なった霜となり、荒涼たる光景を現出している。

幾重の霜ぞ見るもすさまじ

09　**遠近の鐘に目ざめて出づる夜に**

《解釈》あちこちから聞こえる払暁の鐘に目を覚まし、旅宿を出る。道は幾重にも霜が置き重なり、いかにも寒々としている。

※「霜」に「鐘」が寄合。他に「更くるから霜さえまさる月の影／鐘もあまたの遠近の声」（文安月千句・第五「何路」三七／三八）など。「高砂の尾上の鐘の声すなり暁かけて霜やおくらむ」（千載・六‐三九八、前中納言匡房）の歌が有名。『山海経』の「豊嶺の霜の鐘」の本説に拠るとのことである（原典未確認）。

遠近の鐘に目ざめて出づる夜に

10　**しづまる宿り人や寝ぬらむ**

《解釈》あちこちから聞こえる払暁の鐘に目を覚まし、旅宿を出る。他の人はまだ寝ているらしく、物音はしない。

※「出づ」に「宿り」、「夜」に「寝」と語を対応させている所がポイント（例示省略）。

しづまる宿り人や寝ぬらむ

11　**誰となく涼しき月に声更けて**

《解釈》夏の夜が更け行くにつれて月の光は涼しさを増す。宵のうちは聞こえていた人の声もしなくなった。みんなもう寝てしまったのだろうか。

※『下草』諸本中、龍谷大本に入集する（七五六）。

誰となく涼しき月に声更けて

12　**水にぞ山の心をも知る**

《解釈》夏の夜が更け行くにつれて、月の光は涼しさを増す。人は次第に眠りについてゆくが、まだかすかに人声のようなものが聞こえる。いや、あれは、普段は他の音に紛れて聞こえない山中を流れる水の音なのだ。それがかえって山の静けさを感じさせる。

※「山の心」は、この場合「山の静けさ」の意として解釈した。例としては「静かな

宗祇独吟「住吉夢想百韻」注解

Commentary of Sumiyoshimusou - Hyakuin

勢田勝郭

Katsuhiro SETA

宗祇独吟中、中期の傑作と呼ばれている「住吉夢想百韻」に対し、現在の研究レベルに則った新たな注解を施す。

本稿が取り扱う連歌は、宗祇が延徳元年の冬に発句の夢想を得、翌年の九月に百韻を満尾したと伝えられるものである（両角倉一氏『連歌師宗祇の伝記的研究』二八六ページ）。それが宗祇中期の傑作であることは、その中の一五句が、自撰句集『下草』の諸本に入集しているという事実をあげるだけで、もう十分であろう。正に、名句のオン・パレードの趣である。本稿は、それについて、今日の研究レベルに則した注解を提供しようとするものである。なお、同様の試みが伊藤伸江氏によってもなされつつあるが（桜井本『夢想之連歌』訳注（一）付翻刻：愛知県立大学日本文化学部論集(11)二〇二一年、以下継続）、互いに補いあう所のあるものとして位置づけていただければと思う。紙幅の都合で具体的に引用することはできなかったが、参考とさせていただいた点は少なくない。お断わりと感謝を申し述べる次第である。

テキストは、江藤保定氏『宗祇の研究』資料編所載のものを基礎とし、諸本と校合して、仕立・付合・去嫌の面でもっとも問題がないと思われるものを私に設定して用いた。ただし、紙幅の都合上、その設定の過程について具体的に述べることは省略せざるを得なかった。また、寄合の指摘も連歌の注解では重要であるが、これも必要と思われる範囲に限った。去嫌については、末尾に一覧表の形で示すこととした。それについては、拙稿「連歌去嫌の総合的再検討」（奈良工業高等専門学校「研究紀要」第五二号）を参照していただきたい。ネット上で見ることができる。一覧表の「凡例」も、そこに譲る。以上、各点、了解されたい。

延徳元年冬（延徳二年九月満尾）

夢想之連歌

01　住吉の松こそ道のしるべなれ

《解釈》歌道の守護神たる住吉の神。その神域の松こそは、この道のしるべとなるものなのだ。

※夢想の発句だから、賦物はとられない。

※住吉の祭神は、本来、航海安全の神であるが、中世には歌道の神としても信仰されるようになった。所謂「和歌三神」としては、住吉明神・玉津島姫・柿本人麿を挙げるのが普通。

※「住吉の神」とすれば水辺として取り扱われるが、単に「住吉」、あるいは「住吉の松」としても水辺とはしないのが古来の作法。従って、打越の第三で「船」「浜」が詠まれるが、不都合ではない。

住吉の松こそ道のしるべなれ

02　遠里小野の雪のかへるさ